モノクロの世界

apo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モノクロの世界

【Ｎコード】
Ｎ６７１８Ｏ

【作者名】
ａｐｏ

【あらすじ】
ジンがシェリーに対して抱いている何だかよく分からない感情について。

出会い（前書き）

投稿小説二作目です。

出会い

それはモノクロの世界だった。

人にはそれぞれの「色」がある。だが、それは常に変化する。人との交わり、時の流れ。死がそれを奪うまで「色」は移ろいゆく。

ここにいる人間は皆モノクロだ。皆かつて持っていた「色」を忘れ、「黒」の濃淡を競い合っている。

他を絶対的に寄せ付けない「黒」。周囲を暴力的な作用で汚染する「黒」。

この組織で昇り詰めるということは、その「黒」に否応なく犯されることを意味していた。

「ジン」

そう呼ばれた男は、少なくともそのように思っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……何でしょう」

「この男、どうするべきだと思う？」

「生かしておいても我々にメリットはありません。殺りましょう」

「ふむ。では任せる」

組織を支配するロジックはシンプルそのものだ。自分たちの目的のためなら、利用できるものは徹底的に利用し、妨害する者は手段を選ばず排除する。能力あるものは取り立てられ、役立たずは容赦な

く斬り捨てられる。ここでは世の人々を悩まし続けるせせこましい人間関係のあれこれに頭を煩わせられることもなく、仕事にひたすら集中することができた。……良心の呵責さえなければ、の話だが。
（“働き過ぎの日本人”といえども俺ほどのワーカホリックがどれだけいようか？）
ジンはやや自虐的ともとれる笑みを浮かべた。

「それより兄貴」
遜った態度で話しかけてくるのは組織の中でウォッカと呼ばれている男だ。なぜかジンのことを「兄貴」と呼んで妙に慕ってくる。ジンとは仕事上パートナーを組むことが多く、今も移動のために黒のポルシェ３５６Ａを運転している。ジンは助手席。
「シェリーって女のこと、聞きました？」
ジンは黒帽子の下に怪訝そうな表情をつくった。
「シェリー？」
「ええ、なんでも組織の新薬開発プロジェクトに参加するために留学先のアメリカから日本に帰ってきたみたいなんですけど、そいつ、なんとまだ１５歳らしいんですよ」
「……若いな」
そう言いつつもジンには特別の感想はない。若かろうが、老いていようがどうでもいい。使い物になるのかならないのか、それだけがジンのシェリーと呼ばれた女に対する唯一の関心であった。
「ええ、向こうのなんとかとかいう名門大学でも格別の成績を修めたとかで、あの方も大変期待されてるらしいですぜ」
「早い段階でコードネームを与えたのもその期待の表れ、というわけか」
「……どうです、兄貴？そのシェリーって女が配属されたとかいう研究所がこの近くにあるらしいんですけど、ひとつ、面を拝んでみませんかい？」
ウォッカはそのがっしりとした顎を歪ませて何やら楽しげな笑み見

せている。
「フン、まずは目の前の仕事だ。話の続きはそれからにしよう」
冬のどんよりした雲の下、雪がちらつき始めていた。

研究所の廊下で捕まえた４０代ぐらいに見える小男の所員は明らかに戸惑っているようだった。
ジンやウォッカの属しているのはいわば組織の実働部隊で、その役割は暗殺や取引、さらには組織への新しいメンバーの勧誘などであり、普段、組織の研究者や技術者のグループとの接触は稀であった。それが突然アポもなしに訪問を受けたものだから、この小男も何事かと思っているのであろう。
「安心しろ。俺たちはただそのシェリーって女を一目見てみようと思っただけだからよ」
ウォッカが肩をポンポンと叩くと、応対していた白衣姿の男は小さくお辞儀してジンたちを小さな面会室へと案内した。

味気ない面会室の内装に暇つぶしの材料を見つけることを諦めたジンがソファに座って煙草をふかし始めると、間もなくその女はやってきた。

先ほどの小男が先導するようにドアを開けると女は挨拶もせずにスタスタと部屋の中に入っていき、ジンやウォッカと向かい合うかたちでソファに腰掛けた。両脚を軽くクロスさせ、腕組みを決めた上で言う、「私がシェリーよ。今日はお寒いなか何の御用かしら？」

ウォッカはシェリーの横柄な態度に呆気にとられたようだが、ジンは黙ったまま彼女の姿を検分した。顔立ちは端正だ。美人と言っていい。赤みがかった茶髪にはウェーブがかかっている。切れ長の眼。瞳には碧が入っている。純正の日本人ではあるまい。服装は紫のタートルネックセーターに黒のスラックス、その上に羽織った白衣が

妙に映える女だ。

「こっちも暇じゃないんだけど」
シェリーの眠たそうな瞳がジンを見つめていた。

「おい、貴様……」
シェリーの振る舞いに組織の幹部としてのプライドを傷つけられたのだろう、思わずシェリーに食ってかかろうとしたのはウォッカだったが、ジンはそれを手で制した。ジンは自分のカバンを取り上げ、
「……帰るぞ」
「え？」
これにはウォッカもシェリーもポカンとした表情を浮かべた。まだシェリーがやって来てから一分とたっていない。構わずソファから立ち上がったジンはシェリーに不敵な笑みをくれてやったが、シェリーはそれを受けても表情は変えず、それどころか、
「ちょっと、自己紹介ぐらいしていったらどうなの？私、あなたたちのこと、何も知らないんだけど」
などと溜息交じりに言うものだから、ジンは思わず声を出して笑ってしまった。

面白い。

「俺はジン。こいつはウォッカだ」
ジンは自分の声音がどこか楽しげに響いていることに気づいていた。
「よろしくな、シェリー」

ジンは研究所の出口に向かって無言で廊下を歩いていた。
「……にしても妙な女でしたね、兄貴？」
沈黙に耐えかねたのか、ウォッカは口を開いていた。
「あれで１５歳ですか」

１５歳！！
ジンは再び小さな笑い声を洩らした。１５歳！！面会室にいたジンは不覚にもその事実を忘れてしまっていた。いや、この表現は正確ではない。彼女の所作、言動、そしてそこから立ち上がるオーラが彼女の本当の年齢を忘れさせたのだ。ジンの中に決して不愉快ではない敗北感が広がっていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それはモノクロの世界だった。誰もが「黒」から逃れられない世界だ。
だがジンは今日、そこに「色」を見つけた。何色だかは知らないが、彼女――シェリーは確かに自分の「色」を持ってあの場にいたのだ。
ジンは自分の中にゾクゾクとした喜びが湧き起こるのを感じていた。新しい玩具を買ってもらった子どもというのはこんな感じなのだろうかと想像した。
（楽しみじゃねぇか……）
ジンは内心で舌なめずりしていた。
（あの「色」が黒く染まっていく様を見るのはな！）

出会い（後書き）

設定については、原作をしっかり読み込んで確認したわけではないので、いくつか原作との矛盾点が見つかるかもしれませんがご了承を。

行為と薬（前書き）

微エロ描写あり（ただし間接的かつ淡白なものです）

行為と薬

ジンは2日後、シェリーの住まう宿舎を訪ねた。
いや、その実「訪ねた」などという穏当なものではなかった。ジンは、呼出鈴を聞いたシェリーが玄関から出てくると、彼女を無理矢理に部屋の奥へと押し込んだ。服を剥いだ。唇を塞いだ。彼女が顔を引きつらせて抗議の意を示したことに、一定の満足を得た。そうだ、抵抗しろ。俺はそれを凌辱する。ジンはその野蛮な手を止めるつもりはなかった。

彼女にとってその種の行為は初めてのようだった。だが、言葉や態度にはそのことを一切出そうとしなかった。彼女はおおよそ処女性などというものには何のロマンスも感じていないようだった。ジンが部屋を出るとき、彼女はジンのほうを見ようともせず、ただその美しい胸を露出させた上半身をベッドから起こし、部屋の壁のある一点をじっと見つめていた。その明晰な頭脳を動員して今日の行為に関する考察をまとめている最中なのかもしれない、とジンは思った。

翌日、研究所にシェリーを訪ねたジンは、自分がまたしても敗北したことを知った。
ジンと会った彼女はまるで昨晩のことなど何もなかったかのように、実に自然に振る舞ったのだ。そして決意を新たにするジンに彼女は極上のホットコーヒーを馳走した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ジンは暇を見つけてはシェリーと会うようになっていた。といっても、お互い多忙の身で機会自体は決して多くなかったし、またその

方法にしてもジンがシェリー宅へ一方的に押しかけるというものだったが。ジンは必ずシェリーがベッドに入るような頃合いにやってきて、体を重ね、そして帰っていった。

シェリーとの行為はまるでスポーツ選手が練習前にやる準備体操のようであった。規則的な運動の反復。そこには抑揚もなければ緩急もなかった。

ただ、彼女はその最中に時折「乱れ」を見せた。ジンはその「乱れ」を生み出すことに全精力を傾けたが、彼女はそれに必死に抗っているように見えた。彼女は何かと戦っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

3年後、ジンは組織の中枢にあって実働部隊を指揮する立場にあった。一方、シェリーも組織にとって重要な新薬の開発責任者となっていた。

ＡＰＴＸ４８６９――ジンがその薬の名を知ったのは薬の開発者であるシェリーを通してではなかった。ジンとシェリーは互いの仕事のことをほとんど話さなかった。相手のことを知りたいとも思わなかったし、自分のことを知って欲しいとも思わなかった。ただ、粛々と交わる。そんな関係を続けてきた。

ジンがその薬を知ったのは仕事の一環としてであった。表紙にただ「ＡＰＴＸ４８６９」の印字とマル秘の判があるだけの簡素な報告書が彼の元に回ってきたのだ。

彼にとってその報告書の重要なポイントは2つだけだった。ひとつはラット実験の段階でその薬が、体内に薬品の痕跡を一切残すことなく実験対象を尽く死滅させたこと。もうひとつは薬の開発責任者がシェリーであったことである。無論、報告書には新薬が達成すべき目標についても明確な記述があったが、ジンは報告書を読み終え

るころにはそれを忘れていた。

ジンはシェリーに感づかれないように試作段階のＡＰＴＸ４８６９を入手し、この優れた「毒薬」を懐に忍ばせて持ち運ぶようにした。間もなく、それを使用する機会がやってきた。遊園地の物陰での取引現場を工藤新一という男が目撃した。「高校生探偵」を気取ってメディアに持て囃されてる男である。ジンは、ウォッカが行っていた取引の現場をカメラで収めることに夢中になっていたこの男を背後から鉄パイプで殴り倒し、そしてＡＰＴＸ４８６９を飲ませた。死亡は確認できなかったが、その結果はメディア上で工藤新一の音沙汰を聞かなくなったことから明らかであろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ちょっとジン、あなたどういうつもりなのよ！」
研究所にやってきたジンの姿を見つけるなり、シェリーは彼女の研究室まで彼を引っ張っていって、鋭い口調で詰問した。
「……何のことだ？」
「とぼけるんじゃないわよ、あなた、あの薬を……ＡＰＴＸ４８６９を殺しに使ってるんですってね！」
ウォッカのやつが口を滑らしたのよ、と彼女は言ったが事実ではない。ジンが研究所を視察するウォッカに、それとなく薬の件を漏らすよう指示したのが本当である。
「人体実験に協力してやろうと思ってな」
「ふざけないで頂戴！」
シェリーは凄まじい剣幕でジンを詰ったが、ジンは表情も変えずにそれを聞いていた。そして、シェリーが一通り言い終えると、ジンは薄ら笑いを浮かべながら口を開いた。
「シェリー、お前、この組織にいて自分だけが綺麗でいられると思っているのか？」

「……何が言いたいのよ？」
シェリーの声音は冷静そのものだが、その表情にわずかな怯えが浮かんでいるのをジンは見逃さなかった。
ジンは片手でシェリーの顎をくいと持ち上げ、顔を近づけてその両目をじっと見た。瞳が、揺れている。
「言わなきゃ分からないか？」
（そうだ、お前もとっくに分かっているのだろう？）
「組織に身を置いている時点で」
（くだらん自己欺瞞は終わりだ）
「お前はとっくに汚れているんだよ」
（だからこっちに来いよ、シェリー）
ジンは手を離し、フンと鼻笑いを残して部屋を出て行った。その場に立ち尽くすシェリーは俯いたまま何も言わず、ただその両こぶしを握りしめていた。

その夜、シェリーはジンに対して露骨な抵抗を見せた。結局、ジンは彼女の身体に手をつけなかった。帰り際、野卑な笑みを浮かべながらジンは小さくつぶやいた。「もうひと押し、だな」と。

行為と薬（後書き）

サブタイトルとか考えるの面倒くせぇ。

この小説を書いているとき、そういえばＴｈｅ　Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ｓｔｏｎｅｓに「Ｐａｉｎｔ　Ｉｔ，　Ｂｌａｃｋ（黒くぬれ）」なんて曲があったなぁなんて思い出してました。だからなんだ、って感じですが。

ジンとシェリー、やっぱり肉体関係があったような気がしますねぇ、僕は。

宮野明美と脱出マジック（前書き）

最終話です。

宮野明美と脱出マジック

シェリーの姉、宮野明美の存在を知ったのは例によって彼女の口からではなかった。組織内で急速に頭角を現しつつあった諸星大という男に関するファイルに目を通しているときにその名を見つけたのだった。その諸星という男が組織に入るきっかけを作ったのが宮野明美だという。聞けば、この宮野明美とシェリー――本名は宮野志保とかいうらしい――はなんとも仲睦まじい姉妹だそうだ。

最適なピースだと思った。

ジンは宮野明美という駒を使ってシェリーをモノクロの世界に引き込むための「詰めの一手」を打つ機会を窺っていた。そしてそれは思わぬかたちで訪れた。

諸星大が組織から逃亡したのだ。彼はＦＢＩの捜査官だった。

「スパイの手引きをした女」として、末端要員ながら宮野明美の責任は重大だった。即刻処刑してもよかったが、ジンはその代わりに彼女に極めて危険な任務を押し付けることにした。銀行強盗。成功率はだいたい４分の１といったところだろうか。失敗すればそれまで。成功したらしたで、ジンは適当な理由をつけて彼女を殺すつもりだった。

任務遂行に当たって宮野明美は条件を突きつけてきた。「志保を組織から抜けさせてやって欲しい」と。ジンはその身の程をわきまえない発言に呆れる思いがしたが、豪胆さとか向こう見ずのなさはどこかシェリーにも通じるものがあると思った。ジンは条件を飲んだ。が、言うまでもなくそれは表向きの話だ。約束を守るつもりなどジ

ンには更々なかった。

結果として、銀行強盗は成功した。ジンは宮野明美の意外な手腕に感心したが、方針を変えるつもりはなかった。「約束を果たすため」と言って、港湾地区のコンテナ置場に彼女を呼び付けた。彼女は哀れにもジンが約束を果たすことを疑っていないようだった。シェリーの件について応じられない旨を伝えると、彼女は銀行強盗で得た１０億円のありかを教えないなどと言い始めた。殺しの口実にはちょうどいい。ジンは彼女のはらわたを拳銃でぶち抜いてやった。カネのありかについてはだいたい見当がついていた。

が、カネは結局回収できなかった。警察が不可解なほどの素早さでそれを発見したからである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌日、ジンは時間を見つけてシェリーのいる研究所を訪問した。

その日の朝刊一面は「１０億円強奪犯自殺？」と写真付きの大見出しで宮野明美の一件を報じていた。

適当な所員を見つけて話を聞くと、シェリーは自分の研究室に籠っているという。

ジンがシェリーの研究室にノックもせずに入ると、デスクの前に座り、片肘をつきながら、何をするでもなくただボールペンを弄るシェリーの後姿があった。彼女はドアの開く音を聞いて、座ったままゆらりと振り返り、そしてジンの姿を認めた。

彼女はその一瞬のうちに悟ったのだろう――今日、このタイミングでジンが自分に会いに来ることの意味を。

「あなたが、やったの？」
その声は普段の彼女のそれとほとんど変わらなかった――ほんの微かな震えを除いては。
彼女の眼を見た。そのまなざしは彼女が今まで見せたことのないような弱々しさ――すがるような色さえあるように思われた――を感じさせた。ジンにはその意味が理解できなかった。ただ、
「そうだ」
とだけ言った。そこには何の後ろめたさもない。
シェリーは眼を伏せて、「そう……」と小さく呟いた。

「どうしてなの？」
ふと、彼女の声にいつもの鋭さが戻った。その切れ長の眼がキッとジンを睨みつけた。
「どうして姉は殺されなきゃならなかったの？」
ジンは沈黙を守る。
「答えなさい！！」
シェリーはガタリと椅子から立ち上がって言った。その声はほとんど怒鳴り声に近かった。
それでも何も言わないでいると、シェリーはジンのもとにツカツカと歩み寄り、服に掴みかかりながらヒステリックに詰問を始めた。
……が、その叫びはほとんどジンの耳には届いていなかった。ジンは片手でシェリーの腕を強引に払いのけた。バランスを崩したシェリーの身体が本棚にぶつかり、上段のほうの本が何冊か落ちた。ジンはその様子を目に留めることもなく立ち去った。

そうだ、これでいい。
利口な彼女のことだ、もうすべて分かっているはずだ。この世界で生きていくということがどういうことなのかを。
あとは、彼女自身が変わるだけなのだ。

その後、ジンは彼女に会いに行くのをやめた。
ジンのもとには組織の正式ルートからシェリーによる問い合わせが来ていた。内容は見ずとも分かるので、目も通さずに処分した。
今は放っておくのがいい。時間は確実に彼女を黒く染め上げるだろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宮野明美の事件から二か月ほどたったある日、ジンは例の研究所の所長から連絡を受けた。
シェリーが一週間ほど前から姿を現さず、連絡も取れないという。心配した所員が何度か彼女の部屋を訪ねたがいずれも留守であったらしい。
はて、とジンは思った。彼女は失踪でもしたのだろうか？しかし、組織の力を知っている彼女がそんな愚かな手段に出るとは考えられなかった。とりあえず、宿舎の彼女の部屋に行ってみることにした。合鍵を用意してシェリーの部屋の前に立ったジンには匂いで分かった。いる、この中に。だが分かったのはここまでだ。何故彼女が部屋に引き籠っているのかは本人に問いただす必要があった。
ジンは呼出鈴も鳴らさずに部屋に入った。

彼女がこちらを見つめていた。

彼女の姿はまるで普段通りだった。白衣こそ着ていないが、服装はいつもと変わらず地味目。部屋の内装も前来た時のままだ。――変わったところがあるとしたら、テーブルの上のよく見えるところに立て置かれた宮野明美の写真ぐらいのものだった。

ジンの姿を認めると、彼女は手に持っていたコーヒーカップをテーブルに置き、

「あら、何の用？」
と言った。声自体ははっきりしていたが、そこには意志というものが一切感じられなかった。

「……来い」
ジンはシェリーの腕を掴むと、力づくで彼女を部屋の中から連れ出し、車のところまで引っ張っていった。彼女は特に抵抗しなかった。彼女はこの行動の帰結するところも、何もかもすべて分かっているのだ。

分かっていて、サボタージュという行動に出た。

ジンは表情こそ変えないものの、内心は怒りにうち震えていた。
（なぜだ……）
全く理解できない。
（なぜそんなバカな行動をする？なぜ自分自身を変えようとしないのだ？）
この俺があれほど手を尽くしたというのに！

シェリーを研究所に連行したジンは、とりあえず彼女を研究室に放り込んでみたが、何もやる気はないらしい。結局、彼女はその日の終業までの時間を髪の毛弄りとボールペン回しだけに費やした。

ジンはシェリーに手枷をし、白衣も脱がさぬままに研究所の個室に閉じ込めた。
シェリーはもうダメだ。あの女は変わらない。「黒」には染まらない。
（その代わり、俺がこの手で葬ってやる）
コードネームを持つ彼女の処遇をジンひとりで決めるわけにはいかなかった。だがその態度を変えようとしない彼女の運命などもはや

決まったも同然だ。数日後には愛する姉のもとに送られるだろう。
だが翌朝、ジンは驚くべき報告を受けた。
シェリーがあの部屋から忽然と姿を消したという。
ジンは研究所内およびその周辺の捜索を指示するとともに自身も研究所に急行した。

シェリーがいた部屋を検めた。手枷は鉄管に掛かったままであり、それ自体にも特に細工されたような形跡はなかった。部屋には小さなダストシュートもあったが、常識的に考えて脱出経路は外から施錠されていたはずのドアということになる。だが、朝に所員が確認した時も鍵はかかったままだったらしい。つまり、発見を遅らせるためか、あの女はご丁寧にも鍵をかけ直して外出されたわけだ。是非お礼を言ってやらねば！

今思えば昨日シェリーが見せたあの無気力感も彼女一流の演技だったのかもしれない。そうだ！そうだと思えば納得できる。彼女はああやって俺の油断を誘っていたわけだ。素晴らしい！
そして全くもって謎なのが彼女の脱出方法だ。想像さえつかない。いったいどんな魔法を使ったというんだ？
……だが、確かなことがある。シェリーは死んでいない。今もどこかで生きているのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局、モノクロの世界の中で不思議な色彩を持ち続けた女は、そこから逃げることを選択した。裏切り者には死を。それがこの世界の掟である。当然彼女もその対象となるであろう。

だが、ジンにとってシェリーはそれ以上の存在だった。あいつは組織だけでなくこの俺をも裏切った、「黒」に染まる覚悟も持たない馬鹿な女だ――そう詰るのは簡単だった。だがジンは気付いていた。あの女は明確な意志を持って「こちら」へ来ることを拒んでいた。彼女の存在はそのまま、彼女を「黒」に染め上げられなかったジン自身の無力さを象徴していた――殺さねばならぬ、この手で。ジンはそう決意した。

宮野明美と脱出マジック（後書き）

酷いサブタイトル……。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。
この小説は、「黒の組織」に関する長編小説の構想を練っている時に、ふと思いついて執筆されたものです。特に行き詰ることもなく、気持ちよく書くことができました。

反省点としては「色」というモチーフをうまく活かせなかったところですかねぇ。
逆に心情描写に関しては前作よりはマシになったと思います。ジンもシェリーもあまり喋りませんし、激しいアクションや目の覚めるような推理があるわけでもないので、心情描写ぐらいしかやることがないんですよねぇ。

感想とか評価とか待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6718o/

モノクロの世界

2010年11月3日01時50分発行